

休日

覚醒。

いつもどおりの薄汚れた部屋が眼前に広がる。外にもいつも通り雨が降っているだろう。人造眼を埋め込んだ左頭がずきずきと鈍い痛みで教えてくれる。

それを振り払おうと頭を動かすうちに、目覚めを検知した義脳が今日の予定を展開する。

終日、例会。

面倒なので初期設定である終日のまま叩き込んでいた予定が瞼の裏に投射された。

あれからもう一ヶ月。

ぺらぺらの襤褸布団をずり落としながら寝台を這い出し、端末を復帰させる。友人たちは神経接続に対応した新型を薦めてくるが、生憎定職を持たない私には無理な相談である。かなりがたがたきているが、当分これを騙し騙しやっていくしかない。

端末をいつもどおりに操作すると、膨大な情報を集積した書庫が開放される。

旧世紀から続く由緒正しいところであるらしい。もちろん、海賊版だが。

電子化した紙媒体、蒐集された電子資料、それらの関連情報。先人たちの積み重ねで造られた魔窟である。

私が入館許可を得たのは、数年前。

やつは不敵に笑っていた。

数度の挑戦を経て、どうやら私は気に入られていたようだ。

あの日も一戦を終えた別れ際、今では珍しい紙の端に何か書いてよこした。それこそ、この秘鍵。

最初はその膨大さに圧倒されて瞳の光量調節がおかしくなったほどだ。

もはや現物を手に入れることは至難の業、電子情報としても散逸している旧世紀の遺物。歴史によって引き裂かれたものたちが、そこでは整然と生きていた。

その中を私は泳ぎ、今日使うものを確保し、眼の記憶装置に転送する。

無線で転送しているうちに、歯を磨き体を洗う。合成石鹼は泡立ちが良くない。今度はもう少し良い物にしようとしてと毎度後悔する。次も同じようなものになるだろうが。

服を着け、雨風にさらされ草臥れてはいるが天然素材だけあり保温性だけは確かに思える外衣を羽織り、栄養剤を錆臭い水で一気に流し込む。

口一杯に微妙な甘味ときつい酸味が行き渡る。能書きは桃味と主張しているが、認めるものも能書きくらいだろう。嫌な具合に頭が冴えた。

壊れかけた扉のいいかげんな電子錠をかけ、年代物の文化人形がのべつ箒をかける路地を抜け、地下へ。

寒さを避けて地下道で焚き火する人々を横目で見ながら駅へ。運よく自動改札を一回で抜け、目的の電車に飛び込めた。ここまでで一時間ほど。今月は間に合いそうだ。

事故も襲撃もなく目的の駅で地上へ出る。

何度来ても迷いそうになる入り組んだ路地を目指す。赤の看板、青の看板、緑の看板で曲がり、また地下へ。そこでは開始前だというのに先客が神経接続で決闘をしていたり、どこから持ってきたか旧世紀ものを見せびらかしたりしている。気楽だ。

見慣れた顔のひとりが声をかけてきた。いつも大変だ大変だと謂っているが仕事は大丈夫か訊くと、今月はまだいちども手入れがないらしい。珍しいこともある。

それはそうと、今回はまともなんだろうなと相手に振る。前回は散々だったからと告げると相手はにやりと笑うのみで、準備があるからと奥の方へ引っ込んでいった。外衣のかくしに手を突っ込み、樹脂製骰子の感触を確かめる。

こればかりは、実物にかぎるのである。

今日も、少しばかりの幸運があらんことを。